

The Great Gatsby から伝わるもの
——人は過去から逃れることはできない——
(You can't escape the past.)

内田 勉

F. Scott Fitzgerald (以下、フィッツジェラルド) の代表作 *The Great Gatsby* はアメリカ文学作品の中でも最もよく論評される小説の一つであり、私自身も既に何回か論文を書いたことがある。作品を何回読んでも、分からない部分があり、論文を何回書いても書き切れていないという思いを持っている。私にとって、研究年報で発表出来る最後の論文は、*The Great Gatsby* を読み返しながらか、この作品の持つ様々な訴求力の中でも、今の私には、どういふものが一番深く伝わってくるか、そのことに関して考察する。

The Great Gatsby の中で最も有名な台詞は、語り手 Nick Carraway が Jay Gatsby に警告する “You can't repeat the past.”(86)である。¹⁾ Gatsby は即座に反駁し、“Why of course you can!” と答えるが、言うまでもなく、間違っているのは Gatsby であり、過去を取り戻そうとする彼の夢は不可避免的に潰え去る。フィッツジェラルドが書いた数多くの story の中でも、一番の傑作と評価されているのは “Babylon Revisited” (*Saturday Evening Post*, 21 February 1931)であろうが、その作品テー

1) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Cambridge University Press, 1991. 以下、原作からの引用は全てこの版により、引用ページのみ文末括弧内に記す。引用文を日本語で記す時は、全て引用者による訳である。引用に該当する箇所を要約する場合も同様である。原作の別の版を使う場合は、その旨記す。

マは You cannot escape the past と定義できると思う。“Babylon Revisited”の中でこの表現が使われているわけではない。しかし、作品の主人公 Charlie Wales が、破綻した過去の生活から必死になって再生の努力を続け、再生を成し遂げたという段階になって、一気に過去のしがらみが彼に襲いかかり、再生のための目標が奪われてしまうという物語のテーマは You cannot escape the past と明言できるだろう。この表現自体は、この作品だけではなく、フィッツジェラルド作品全体の中でも一度も使われたことがない。しかし、フィッツジェラルド作品全体を今、想起してみると、彼の文学作品のほぼ全てにおいて、メッセージ性の強度は作品によって異なるものの、通奏低音の如く伝わってくるものが You cannot escape the past という理（ことわり）であると思う。そして、このことわりが、非常に強く伝わってくるのが *The Great Gatsby* であるということ論証したいと思うのである。

ただ、あらかじめ断っておかねばならないが、You cannot escape the past という表現は、フィッツジェラルド作品においては使われてはいないものの、他の複数の作家の複数の作品において何回か使われている。一般的な理（ことわり）であるが故に、ユニーク性は全くないし、そういう、言わば、当たり前のことが *The Great Gatsby* の主要なメッセージであるという結論であれば、それだけで、面白みがない、と思われても仕方がない。しかし、そのようなことを考察した研究は、私の知る限りはないし、誰かが一度は試みても全く無駄ということにはならないと思う。また、そのような考察をしていく過程で、少なくともこれまでは指摘されていなかった事柄に光を当てることも出来ると思う。

過去と現実とは分かち難く結びついており、過去から逃げるということは、現実から逃げることをも意味している。本論で使用する、「過去」とは、既に過ぎ去ったことという意味を担っているが、その意味だけが 100% というのではなく、部分的には、過去と接続する現在の現実をも含む、不可避的に含まざるを得ないということをあらかじめ断っておく。

文学作品には一般的に作者の意図がある。作者の意図を作品の前書きに記す作家も珍しくない。Henry James はその有名な例である。しかし、作者の意図と、作品の意図とは必ずしも同じではない。作家自身は、特定の時代の特定の状況、特定の心性を描くことを意図していたかもしれないが、百年、二百年という歴史の試練に耐えて読み継がれる文学作品は、作者の意図をはるかに超えたものを読者が作品の中に読み取っていることが珍しくない。Toni Morrison がエッセイの中に書いていたが、*Adventures of Huckleberry Finn* は porous (穴が多い) である、ということである。私の狭い読書体験でも、傑作と評価されることになる文学作品は porous である。*The Great Gatsby* も porous である。一つの例を挙げる。Chapter 4 において、Gatsby と Nick とのランチの会話の終わりのほうで、ついさっきまで同席していた Meyer Wolfsheim が 1919 年のワールドシリーズで行なわれた有名な八百長試合の黒幕であることが Gatsby によって明かされる。その後の会話を引用する。

“How did he happen to do that?” I asked after a minute.

“He just saw the opportunity.”

“Why isn’t he in jail?”

“They can’t get him, old sport. He’s a smart man.”

I insisted on paying the check. As the waiter brought my change I caught sight of Tom Buchanan across the crowded room(58-9).

上記引用文における Gatsby の最後の台詞 “They can’t get him, old sport. He’s a smart man.” に続く地の文 “I insisted on paying the check.” の間には何かが省かれている。そこが空白になっていると読むのが自然である。これほど重大な話題がこの形で突然終わり、いきなり昼食の勘定の話に変わることは有り得ない。2019 年に刊行された Cambridge 版 *The Great Gatsby: A Variorum Edition* (88-9) も含め多数の *Gatsby*

text を参照したが、いずれも上記引用通りで、“They can’t get him, old sport. He’s a smart man.” と “I insisted on paying the check.” の間に space break のようなものはない。テキスト自体には空白の表記はないのである。しかし、空白があると考えることは不可能である。その空白に何を読み込むかは読者の想像に委ねられている。テキストの表記では空白は示されていないが、明白に空白が分かる珍しい例であり、こういう所にフィッツジェラルドの巧みさがある。*The Great Gatsby* は初版のページ数でも 218 ページであり、比較的短い小説 (short novel) と言われるが、この作品の研究論文は既に何万ページ以上もあり、確実に今後も増えていく。その一つの理由は、作品が porous であり、それだけに読者の想像力を喚起し、読者に解釈を促す構造を持っていることであろう。私の想像を敢えて言おう。フィッツジェラルドは、敢えて不自然な穴をここに作ったと思う。この空白部分で、Nick は、Wolfsheim との関係を Gatsby に問いただし、Gatsby の仕事の詳細を聞いてもおかしくはない。Nick はこの日午前の車中における Gatsby の説明を完全には信じていなかったのだからである。ランチの席で Wolfsheim と Nick だけになった時に、Nick は当たり障りのない非常に限られたことしか質問していない。ランチの後には、Jordan とのデートがあり、その時、Gatsby からの要請が伝えられることが Nick には既に分かっている。このタイミングで Gatsby の正体に迫ることは、デートの際に、差し障りになると Nick は思ったのであろうか。

Nick が実際に Gatsby の仕事について質問したのは、Chapter 5 で Daisy と Gatsby を自分の家で再会させた後である。Nick が Gatsby に彼の仕事を聞くのが当然になる文脈がある。以下に引用する。

“Yes.” His eyes went over it (Gatsby’s house), every arched door and square tower. “It took me just three years to earn the money that bought it.”

“I thought you inherited your money.”

“I did, old sport,” he said automatically, “but I lost most of it in the big panic — the panic of the war.”

I think he hardly knew what he was saying, for when I asked him what business he was in he answered, “That’s my affair,” before he realized that it wasn’t the appropriate reply”(71).

Gatsby に何の仕事をしているのかを尋ねるならば、Nick はもっと早くに尋ねるべきではなかったのか。自分の家で Daisy と Gatsby を引き合わせておいて、その後で、尋ねてももう遅いのではないか。人間というものは常に合理的に行動するものではない。矛盾した行動をするものだと考えることは出来るとしても、このタイミングで聞くのはやはり遅すぎるし、おかしい。Chapter 4 において、警察官にスピード違反で停車を命じられて、それを切り抜けた時、“I was able to do the commissioner a favor once, and he sends me a Christmas card every year”(54)と、Gatsby が Nick に説明した時に聞くのが自然である。また、Nick が Gatsby の仕事を聞くのがもっとも自然になっていた文脈を引用する。

He fumbled with a series of beginnings. “Why, I thought—why, look here, old sport, you don’t make much money, do you?”

“Not very much.”

This seemed to reassure him and he continued more confidently.

“I thought you didn’t, if you’ll pardon my—You see, I carry on a little business on the side, a sort of side line, you understand. And I thought that if you don’t make very much— You’re selling bonds, aren’t you, old sport?”(65)

この時にこそ Nick は、a little business on the side ではない Gatsby の

本来の仕事は何かと聞くのが一番自然だった。前記した p. 71 でも Nick が Gatsby の仕事を聞くのが自然になる文脈は作られているが、そのずっと前に、Gatsby の仕事を聞くのが自然になる文脈はいくつもあった。Nick が実際に聞いたのが遅すぎたのは明らかだ。

Gatsby を読み終えると、誰もが、Daisy と Tom は自らの過失を Gatsby 一人に押し付けて、うまく逃げたという感想を抱く。犠牲となった (Daisy と Tom の罪を一人で背負わされたという意味だけではなく、社会全体が、三つの死の責任は Gatsby にあると思ひ込んだという意味では、社会全体の無責任の罪を背負わされた) Gatsby に憐みを抱き、Daisy と Tom に怒りと侮蔑の矛先を向ける Nick の気持ちに我々読者は共感しやすい。しかし、Daisy と Tom は逃げる事が出来たのだろうか。

Chapter 9 で Gatsby の葬儀を終え、Jordan とともに最後の訣別した後、10月下旬のある日、Nick はニューヨークの5番街で Tom に偶然出会う。George Wilson に対して何を言ったのかと Tom に詰問する Nick に対し、自分は真実 “the truth” を言ったのだと断固として自説を言い張る Tom にあきれ果て、もうこのような連中とは付き合えないと思った Nick は以下の感想を漏らす。

They were careless people, Tom and Daisy—they smashed up things and creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness, or whatever it was that kept them together, and let other people clean up the mess they had made (139)

しかし、上記の Nick の感慨は、Nick の語りを信じて読んで来た読者にとって納得しがたいものである。まず、Tom は真実を全て George Wilson に言わなかったことを我々読者は知っている。Myrtle を轢殺した車を運転していたのは Gatsby だと Tom は信じ込んでいただろう。し

かし Tom は、George の妻 Myrtle を愛人にしていたことについては嘘を通し続けた。これだけでも、Tom が George に対して真実を言ったのだと告げられた時、Nick は Tom に対し、それでも真実と言えるのかと反駁するのが当然だ。しかも、この時、Nick は真の轍殺犯が Daisy であることを知っている。真実と Tom の確信する「真実」“the truth”との乖離の大きさを知っている Nick の感慨として、careless people などという表現が似つかわしくないことは明らかである。この時の Nick は、事の重大さを矮小化している。なぜ、矮小化するのかについては、2017年に刊行された拙論「*The Great Gatsby* の研究——語りの真実性と語り手の倫理」を参照して頂きたい。また、上記引用文の最後に付された、一般には省略を意味する点々は、Nick 自身が、この時点においてすら、Buchanan 夫妻に対する自分自身の感慨に納得していないことを示唆するものだろう。こんな感慨で Nick が自分自身を納得させることができるなら、Nick は馬鹿野郎だ。そうではないからこそ、自分の感慨の表現の仕方に納得できていないからこそ、文章の最後は……にした筈だ。Nick はこの時点での結論を保留したのである。

Nick は東部を去る最後の日に、空き家となったままの Gatsby 邸を訪れる。子供が煉瓦を使って落書きした an obscene word が the white steps(140)に残されたまま、月光に照らされて際立っていた。the white steps は、その前のパラグラフに現れる his (Gatsby's) front steps と同義であると考えるのが自然であるから、表玄関に至る階段と考えてよいと思う。その目立つところに、その豪邸のつい最近までの所有者であった Gatsby を侮辱する an obscene word が書き込まれていた。フィッツジェラルドの原作には an obscene word が何であったかは記されていない。1974年に制作・放映された映画の中では、an obscene word は shit という語であった。フィッツジェラルドの頭の中にあった an obscene word が実際にこの語であったかどうかは分からないが、いずれにせよ、大人たちのうわさ話を聞いていた子供の頭で理解された Gatsby に対する an

obscene word は、West Egg の人々の Gatsby に対する最終的な判断を示していた。くず、最低という言葉によって、Gatsby という存在が片付けられたのである。Nick は靴底で階段の石をこすり、落書きを消した。しかし、これは Nick のジェスチャーでしかない。落書きを消しても、Gatsby の汚名は消えないのである。Gatsby の真実を伝える唯一の方法は、Nick にとっては Gatsby の物語を自ら語るしかない。それを語ることは、Nick にとっては自らの責任も自覚せざるを得ないというジレンマに陥ることについては、前記拙論で既に述べたので、本論では上記した別のアプローチによって *The Great Gatsby* という作品が何を伝え得るのかを論じるが、いくつかの点で、前記拙論に更に説得力を与える証拠を今回発見したので、それについてまず述べる。前記拙論(p. 23)では “It was dark now”(63) というのは、Jordan の要請を引き受ける時の Nick の心の状態をも暗示した表現であると書いたが、それだけではなく、この場面の最後のパラグラフの冒頭、“We passed a barrier of dark trees”(63) という表現も double meaning である。そして、次の Chapter 5 の冒頭、その夜、ウェストエッグに戻って来た時、隣の Gatsby 邸全体が灯りで煌々と輝いていた現象を Nick は、Gatsby 邸が燃えているとは考えず、自分の家が火事だとまず思ったのは、Nick の罪の意識が関係しているという趣旨のことを前記拙論で書いたが(p. 24)、この点はもう少し議論しておくべきだったと今思っている。Nick が一瞬、燃えていると錯覚した Nick の家こそが、結局は、この後、大火に例えてもよいほどの大惨事を引き起こすきっかけとなった場所なのである。Myrtle 轢殺、Gatsby 射殺、Wilson 自殺という死の連鎖を引き起こした原因は、この家で起きる出来事だったのである。Wilson の死体の発見を以て死の連鎖が完結した後に、“the holocaust was complete”(126) という火を連想させる表現が使われているのは、死の連鎖の始まりの予兆こそが、自分の家が燃えているという Nick の錯覚の中に示唆されていたからである。いっそのこと、あの時点で自分の家が燃え尽きていればという hindsight としての願望すら

Nick は抱いていたかもしれない。これらの点は、前記拙論における私の解釈を補強する議論として、この場を借りて明記しておきたい。また、この文脈の中で、今回新たに発見した読みを追記する。Chapter 6において、Tom が Sloane たちを伴い、馬に乗って、Gatsby 邸を訪れた場面で交わされた会話である。Gatsby が Tom に向かって “I know your wife,” (p. 80) と言う。Tom は “That so?” と軽く受けとめ、Nick に向かってたずねる。

“You live near here, Nick?”

“Next door.”

“That so?”

上記引用における Nick の最小限の答えの中に、どれほど大きな秘密が隠されているか、Tom の問いに対する Nick のそっけない返答 “Next door.” に、どれほど不気味な重みがあるのかを知り、今回初めて、私は戦慄を覚えた。

本論に戻る。轢殺犯 Daisy は、自分が身代わりになると誓ってくれた Gatsby が殺されたことで、ひき逃げ殺人という重罪から逃れられたであろうか。Daisy 自身が、もうこれで大丈夫という安心感を持つことが出来ただろうか。Daisy 自身の良心がどうであれ、それは有り得ないとテキストからは読める。Gatsby は轢殺事故の翌日に射殺されたが、殺される前に真相を Nick に語っていたかもしれない、或いは Gatsby の手下に知らせておいたかもしれない、もし、Daisy が Gatsby を裏切ったことが明らかになった時には、封印されて金庫に保管されている暴露文書を公開するようにと、手下に指示していたかもしれない、これらのことは Daisy には容易に想像されることであり、いつ真相がばれるか、Daisy は一生、怯えた生活を送らなければならなくなった。Daisy が轢殺犯であることがばれた時、Tom の人生も決定的な影響を受けるが、真相を知らない Tom にとっては、別の不安があった。情婦 Myrtle が死亡し、Myrtle の夫 Wilson も自殺したので、Tom が最も恐れていたこと、Wilson から姦通

罪で訴えられることはなくなったが、Tom 固有の不安がなくなったわけではない。Tom が情婦 Myrtle と一緒にレストランなどに入っていることは East Egg 上流階級の多くの人々に目撃されており、また、Tom が Myrtle にニューヨーク市内にアパートを与え、そこでしばしば乱痴気パーティーを開いていたことは、招かれた人々に知られている。Jordan Baker が Nick に最初に会った Buchanan 邸のディナーの席で、Tom が情婦を囲っていることを知らない Nick に対して返事する場面が、“You mean to say you don’t know?” said Miss Baker, honestly surprised (15) と表現されていることは、Tom の姦通は、Tom の周辺では常識になっていたことを示す。もし、何らかの理由で、容易に起こり得ることとしては、Gatsby 関係者の犯罪が裁判になれば、Gatsby が犯人だとされていた轢殺事件も蒸し返され、Myrtle の妹 Catherine の偽証も覆され、²⁾ いつ、Tom の不倫が表沙汰になるか、その不安から Tom が免れることが出来た筈はない。Buchanan 夫妻が、Myrtle 轢殺事故の翌日、慌てて引っ越しをしたのは、事故車に Daisy が同乗していたことは否定しようがなく、それとの関連で、すぐにでも検死審問に証人として召喚される可能性が高く、取りあえず、事故の管轄区であるニューヨーク州から離れて、Daisy の喚問を避ける必要があったからである。緊急避難であって、二人の将来の安泰を保証するものでは全くない。Daisy はひき逃げ犯であるという過去から、Tom は妻 Daisy が轢殺した Myrtle と不倫関係にあったという過去から、完全に逃げおおせるということは絶対に有り得ないのだ。Chapter 4 において、Jordan が Nick に語る Daisy と Tom に関する話の中で、新婚旅行から帰って来たばかりの Tom が Santa Barbara で交通事故を起こし、Buchanan 夫妻が宿泊していたホテルのメイドがその車に同乗しており、事故で負傷したため、新聞に出てしまったことが語られていたが、金の力だけでは、交通事故も不倫も報道規制が不可能な社会であ

2) Catherine の証言は inquest(検死審問)の場で行なわれたもので、Myrtle 轢殺事件に対する裁判は行われなかった。

ることを示唆している。³⁾ Tom も Daisy も、Myrtle 轢殺事件以後は、これまでとは全く違う、絶えず不安に怯えた人生を送り続けることになる。その意味で、Daisy と Tom は過去に縛られ続けるのである。

Jordan は三人の死に対する責任から逃れ切ることが出来たであろうか。Daisy の犯したことは殺人罪とひき逃げ、いずれも刑法で罰せられる。Tom の不倫も当時では犯罪であり、逮捕され、投獄される可能性もある犯罪である。Jordan の問われる責任は、いかなるものであれ、犯罪ではない。Jordan が一番うまく逃げられそうである。Jordan 自身、三人の死に対して自分にも責任があると感じた様子は微塵もない。Jordan は次第に Nick が惹かれていく女性ではあるが、初めから、狡猾で無責任な嘘つき女として描かれている。プロゴルファーである彼女にとって、最初の大きなゴルフ試合で、自分の打ったゴルフボールを不利な着地点から勝手に動かしたというスキャンダルが生じたが、新聞報道になる寸前で、この問題が突然消失したことを Nick は思い出すが、それは、ニューヨーク市郊外の Warwick で行なわれたパーティーで Jordan が嘘をついたことがきっかけだった。Nick には、この事件が記憶に深く刻み込まれていた。“The incident and the name had remained together in my mind.”(47)。そういう女性と交際し始めた Nick は Jordan を “She was incurably dishonest”(47)とも言っている。それにも拘らず、Nick は Jordan の魅

3) Chapter 1 では、Buchanan 夫妻がシカゴからニューヨークに移動した理由は伏せられているが、実は Nick はニューヨークに来る途中でシカゴに立ち寄った際（シカゴで下車するのは、当時は Minnesota などの中西部とニューヨークを結ぶ直行列車がなく、シカゴ駅で乗り換える必要があった）、夫妻が移動した理由は Tom の女問題であったことを知らされている。Tom に Nick の勤めている会社の名前を聞かれて、答えたところ、聞いたことがない “Never heard of them”(12)と言われて、むっとした Nick が “You will,” I answered shortly. “You will if you stay in the East” と言い返した裏には、シカゴの件は知っているという含みがある。Nick の返答に Tom がむきになって、“Oh, I’ll stay in the East, don’t you worry,” “I’d be a God damned fool to live anywhere else”(12)と答えるのもその含みがある。この時、Miss Baker が “Absolutely!”(12)と合の手を入れるのもその含みがある。シカゴの件を読者が初めて知らされるのは Chapter 7 においてであるが、この作品では Chapter 1 の初めから様々な伏線が張られており、それらの結果として必然的な惨事が起きる構成になっている。

力に抗えず、関係を深めていくことになる。その結果として、Gatsby から頼まれた Jordan が、Gatsby と Daisy を Nick の家で合わせてやってほしいと Jordan から直接要請された時、Nick には断ることが出来なかったのである。Gatsby と Daisy の再会場所として、Nick は言われるがまま自分の家を提供したわけだが、二人の再会に手を貸すことは、いかなる理由があろうとも、当時の社会の道徳基準に照らせば、許されることではない。Gatsby と Daisy の再会が実現したのは、Gatsby、Jordan、Nick の三人の共謀の結果である。二人の再会のあと、やがて、不可避的に大惨事が引き起こされるが、そのことに Jordan に責任がないとは言えない。少なくとも、Nick と同じ位大きな責任がある。しかし、Nick の責任も Jordan の責任も犯罪に問われるような責任ではない。わたしは、共謀という表現を使ったが、この段階では、姦通幫助罪（仮にそのようなものが当時の米国にあったとして）に問われるような行為ではなかった。Nick は何も語らなければ、過去から逃げる事が出来たかもしれない。もし、Nick が語らなければ、Jordan は最初のゴルフ試合でのズルから逃れることが出来たように、⁴⁾ 確実に、過去から逃れることが出来た筈だ。しかし、結局はそうはならなかったのである。

なぜ、私達は過去から逃げる事が出来ないのか。前記したことだが、フィッツジェラルド文学の全体が、You cannot escape the past という不可避的なロジックを形を変え、品を変え、繰り返し語っているように今の私には思われる。それがなぜ、不可避であるのかは、作品ごとに状況も理由も異なっているが、メッセージは一貫していると思う。そのメッセージが一番強く伝わってくるのが、私にとっては *The Great Gatsby* なのである。一番逃げたかった Daisy と Tom は、Nick が Gatsby の人生を物

4) ここで、ズルという表現を使ったのは、当時のゴルフは紳士淑女のスポーツと理解されており、マナーというものはあったが、違反行為を規定したルールはなかった。Jordan の行為はマナーに反することで、眉を顰められるようなことではあったが、罰則を科されるような違反行為ではなかった。

語化することによって、自分たちの悪事が永遠に固定されることになった。Jordan の責任も永遠に固定された。Daisy と Tom と Jordan は、*The Great Gatsby* が読み続けられる限り、彼(女)らの悪質性と卑劣さがいつまでも読者に記憶されることになる。前記拙論で述べたように、Nick の責任も記憶されることになる。ではなぜ、Nick は、自分で自分の卑劣さを結果的にさらけ出すような物語を書かねばならなかったのか。Nick は露悪家ではない。むしろ、偽善者に近いタイプである。自分の悪質さを語ることが Nick の目的ではなかった。しかし、否応なく、Jay Gatsby の運命を知る立場に置かれてしまった。そして、世間一般で真実 (the truth) とされているものが、如何に欺瞞と歪曲に満ちているかを知ってしまった。Nick は元々、金持ちに憧れ、Buchanan のような金持ちになることが目的で、証券業界で儲けようとしてニューヨークに出て来た、1920 年代のアメリカにごろごろいた若者の一人に過ぎない。しかし、まず最初に、Buchanan のような金持ちの内側の実態を知って幻滅し、最終的には彼ら金持ちの非人間性を思い知ることになり、自分の人生の目標を失ってしまった。Nick の幻滅の中には Jordan も含まれている。働く意味と愛する女性を同時に失ってしまった Nick にとって、ニューヨークは住み続ける価値も意味もない世界になってしまった。中西部の郷里に帰るが、その時の郷里は、東部の prep school や Yale 大学で学んでいた時の Nick がクリスマスに帰省する時の郷里とは全く意味が違っていた。無意味な東部から無意味な中西部の郷里に帰るのである。そして、郷里で自分のニューヨーク体験を振り返った時に、Gatsby 一人だけが光彩を放っていたように感じられたのである。勿論、この時でさえ、Nick にとって Gatsby という存在は、ambivalent であった。しばしば引用される箇所だが、Nick は一方で、“Gatsby, who represented everything for which I have an unaffected scorn”(5-6)と Gatsby に対する軽蔑感を述べるが、そのすぐ後で、“No—Gatsby turned out all right at the end; it is what preyed on Gatsby, what foul dust floated in the wake of his dreams

that temporarily closed out my interest in the abortive sorrows and short-winded elations of men”(6)と言い直している。

仕事も愛も喪失し、生きている意味すら失いつつある Nick にとって、最後に残ったものは怒りであった。世間で通用している「真実」というものが、実際は、如何に欺瞞と誤解に満ちているか、貧しいアメリカの若者の抱く夢が如何に歪み、しかし、歪みながらも、Gatsby が愛の純粋性を抱き続けた事実、金持ちたちが、外見は優雅に見えても内面は如何に腐敗しているか、悪事から如何に逃げているか、この不条理としか言いようのない現実を書くことこそが、Nick に生きる意味を与えたのである。

私は本論で、Nick によって書かれてしまったから、*The Great Gatsby* に登場する人々は皆、過去から逃げるが出来ないのだ、ということを主張したいのではない。人は過去から逃げるが出来ないということ、その不可避性は、むしろ、Nick の語り方から生まれて来るものであることを論じたいのである。

そうは言っても、論じ尽くすということは、今の私には手に余ることなので、限定的な形で論ずることをお断りしておく。まず初めに、James Gatz と Dan Cody との出会いがあった。Dan Cody の豪華なクルーザーこそ、James Gatz が望んでいた全てを体現しているかのように 17 歳の少年 Gatz の目に映った。Jay Gatsby はこの時、誕生する。James Gatz はそれまでには Benjamin Franklin 流の節約・勤勉を続けて富を手に入れるという考えは捨てていたし、アメリカ社会の変貌も Benjamin Franklin が *The Way to Wealth* (1758) の中で説いた成功倫理を時代遅れのものにしていった。実際、James Gatz は Dan Cody に会会う前、Lutheran college of St. Olaf で苦学することを試みたが、2 週間で見切りをつけてしまった。Cody が突然死した時、彼の莫大な遺産は Gatsby が相続する筈であったが、何故か、Gatsby には理解できない法律によって、Ella Kaye という Cody の情婦らしきジャーナリストに全て渡ってしまった。Gatsby に遵法観念というものが欠如しているのはこの時の経験

が関係しているだろう。そして、第一次世界大戦への米国参戦。Gatsby は軍人となり、Louisville で Daisy Fay と出会い、⁵⁾ 金と美を備えた Daisyこそが、Gatsby の茫漠としていた崇高な夢の全てを体現した唯一の女性となった。“At his lips’ touch she blossomed for him like a flower and the incarnation was complete”(87)とは、それを意味している。⁶⁾ Chapter 8 で Gatsby 自身が Nick に語ったことによれば、Gatsby はフランスの Argonne の戦場で軍功を立てた。⁷⁾ 戦後、Gatsby は Oxford 大学に一時期通い、帰国できる前に、Daisy は大金持ちの Tom Buchanan と結婚していた。文無しの Gatsby が Daisy を取り戻すためには、早急に自分も大金持ちにならなければならないと考えたのだろうが、そのために、Gatsby は Wolfsheim の誘いに乗って、裏社会で違法な手段で金を儲けるしかなかった。この点が、アメリカの高校や大学で *The*

5) フィッツジェラルド自身、アメリカ国内のいくつかの陸軍基地を転々とした。Louisville 近くの基地に行ったこともある。Louisville はフランス革命で処刑されたフランス国王 Louis 16 世の名前に因む。フィッツジェラルドが二人の運命の出会いの場を Louisville にしたのは、そのことと関係しているのであろうか。

6) Chapter 5 の再会場面で、読者の誰にとっても忘れられない奇妙な事が起きる。Gatsby が自分の洋服を次から次へと誇らしげに取り出して、Daisy に見せびらかす場面である。いつの間にか、愛の価値が、財の価値に変わっていた。驚くのは、うず高く積まれた華麗なシャツの山の中に Daisy が顔を埋めて号泣する場面である。Daisy はなぜ号泣するのか。ここにこそ Daisy の本質が現れている。Daisy は Mammon なのである。Gatsby は Mammon を選んだ。Daisy に出会う前に、Gatsby は既に Mammon を選ぶ道を選んでいた。Gatsby は例外ではない。神を捨てた人間の一人なのだ。それが極端な形で形象化されたのが Gatsby である。極端というのは、裏社会にはいったこと、最後には愛の対象と信じ切った Daisy のために犠牲になることを選んだことである。その点だけに Gatsby の真の美しさがある。Nick が一番書きたかったことにはこの点も含まれていると思う。Gatsby が読者の共感を得ることが出来るのも、この点を欠いては、不可能だった。Daisy の Gatsby に対する愛は嘘だったが、Gatsby の Daisy に対する愛は真実だった。この男を狂人と言えるか。人間として狂っているのは、現実的な判断の出来る Tom や Daisy なのだ。Gatsby は狂っている所がある。しかし、最後に自分の人生を捨てて Daisy を護る Gatsby は狂人ではない。Nick も聖なるものを感じた。the sacredness of the vigil (114) という表現はそれを意味している。Chapter 1 で Tom と Jordan が死臭漂うような vigil と関係づけられているのと対照的である。Tom と Jordan は生き残るが、精神は死んでいるのである。

7) そうであれば、フランス政府から勲章を受けても不思議はないが、Chapter 4 で、Gatsby が Nick に見せた軍功の証拠はモンテネグロ王国のメダルだった。矛盾であるが、この時は、もう Gatsby の夢が潰えた後だったので、Nick にとっては、どうでもいいことだったのだろう。

Great Gatsby を教える時に問題になるらしいが、なぜ、Gatsby は裏社会に入るしかなかったのか。堅気の世界で自分の夢を実現する可能性はなかったのか。フィッツジェラルドの経験では、Gatsby には裏社会に入るしか選択肢はなかった、ということになると思う。フィッツジェラルド自身、除隊後、ニューヨークで広告会社のコピーライターをしていたが、彼の給料では、ゼルダに婚約を破棄されてしまった。フィッツジェラルドは、婚約を破棄されて以後、会社を辞め、故郷に帰って、小説を完成させることに没頭するが、その小説が *This Side of Paradise* として出版されて成功し、言わば、一夜にして有名小説家になったも同然だが、そのことがどれほど奇跡に近いことはフィッツジェラルド自身がよく知っていた。フィッツジェラルドは、今でこそ、天才作家と言われるが、小説の原稿は、Scribner 社の編集会議では社長を含め、否が多数で、没になっていた筈の所を、Maxwell Perkins という編集者が捨て身の覚悟で、出版を支持してくれたおかげで受け入れられたのである。辞職を覚悟した Perkins の支持がなければ、原稿は確実に没になっていた。⁸⁾ Scribner 社がフィッツジェラルドの小説の出版を決定したのは、1919年9月である。⁹⁾ アメリカで過激思想に対する取り締まり (Palmer Raids) が荒れ狂い始める直前であった。*This Side of Paradise* の終わりの方には、主人公 Amory

8) Perkins の辞職発言を最初に述べたのは Scott Berg (*Max Perkins: Editor of Genius*, 1978, p. 16) だが、その書の中では、証拠文書の開示はされていない。Brucoli, *Some Sort of Epic Grandeur* (Second Revised Edition, 2002, p. 99) に記してある文言は、Perkins の言葉の引用のように見えるが、実際は、上記 Berg の書からの引用である。Perkins の辞職発言は事実なのか、legend なのか。私は Perkins が辞職覚悟で、編集会議に臨んだことは事実であると考え。その証拠文書を示す。Hemingway の *A Farewell to the Arms* が、*Scribner's Magazine* 5月号(1929年)から連載され始めた時のことであるが、ボストン市で、同誌5月号、6月号、7月号が発禁処分になった。*A Farewell to the Arms* の刊行を危うんだ Hemingway が Fitzgerald に手紙を出している。Fitzgerald は、心配するなという趣旨の返書 (Aug. 23d., 1929) の中で、"I felt sure that if it came to a crisis he'd threaten to resign to force their hand" (Brucoli, *Fitzgerald and Hemingway*, p. 129) と答えた。これは、いざとなれば Perkins が辞職すると脅して、必ず Scribner 社に出版させる、ということの意味する。Fitzgerald は、Perkins が職を賭して、*This Side of Paradise* 刊行への道を開いてくれたことを知っていたのである。

9) *scott/Max*, p. 21

Blaine が自分は社会主義者であると述べている箇所もある。Palmer Raids が本格的に始まるのは、同年 11 月 7 日、ロシア 11 月革命 2 周年の記念日に合わせていた。タイミングが少し違っていれば、いくら Perkins が捨て身の覚悟で支持しても、会社の同意は得られなかったのではないか。¹⁰⁾ 1919 年 9 月に *This Side of Paradise* の出版が決まったことをフィッツジェラルドがゼルダに伝えると、ゼルダの態度が変わった。¹¹⁾ 出版日は 1920 年 3 月 26 日で、その時までには、小説が成功するかどうかは分からなかったが、Scribner 社による出版が決まった 9 月以降は、それまでは原稿を各出版社に付き返されていたフィッツジェラルドの story が次から次へと商業雑誌に掲載されるようになった。このような変化を見極めて、ゼルダは *This Side of Paradise* の出版前に、フィッツジェラルドとの結婚に同意したのである。アメリカ文学史全体を見ても、最初の小説の成功と結婚をほぼ同時に成し遂げたのはフィッツジェラルドだけではないだろうか。他にも例があるかもしれないが、極めて稀で、奇跡に近いと前記したのはこのような意味も含めてである。裕福な若い美女と結婚するということが、20 世紀の初めごろには American Dream の象徴になっていた。フィッツジェラルドの場合は、時の偶然と、捨て身の覚悟で支持してくれた編集者の存在と、彼自身の文才に恵まれて、無一文の無名な若者が American Dream を実現できたが、フィッツジェラルド自身、自分に起きた事がどれほど例外的なことであるか、よく知っていたのである。だからこそ、彼の文学の前半期のテーマは、“Poor boys shouldn’t think of

10) Palmer Raids と呼ばれる、司法長官 Palmer の指揮による赤狩りは、ロシア 11 月革命 2 周年にあたる 1919 年 11 月 7 日に行なわれた大規模な左翼取り締まりをもって始めるとされるが、実際には、小規模ではあったが、New York 州 Buffalo で、無政府主義者グループに対する最初の襲撃が同年 7 月に行われた。しかし、裁判所が取り締まりの合法性を認めなかったので、不首尾に終わった。

11) フィッツジェラルドがゼルダに、*This Side of Paradise* の出版が決まったことを伝える手紙等は、私の知る限り、知られていない。しかし、1919 年 6 月に途絶えたゼルダからの手紙が、同年 10 月からフィッツジェラルド宛に複数、書かれるようになる (*Dear Scott, Dearest Zelda*, 37-41 がその証拠文書になる。) 小説の出版が決まった 9 月に、すぐさま、フィッツジェラルドがゼルダにそれを知らせたことは間違いない。

marring rich girls”(Ledger, 170)になったのである。アメリカの貧しい青年達の殆どにとって、American Dream の実現は不可能であった。Gatsby の選択は、彼の時代の条件下では、貧しいアメリカ青年にとって、夢をどうしても実現しようと望み続けたら、ほぼ唯一の選択肢であったことをフィッツジェラルドは自分の体験から確信していたのである。その意味も含めて、*The Great Gatsby* は、フィッツジェラルドの青年期の体験の全てを投入した作品である。

その小説の Chapter 1 で、Nick は金持ちの世界の内部を知り、金持ち達のモラルの欠如と精神の荒廃を垣間見るようになった。そして、Tom のモラルの欠如故に、せっかく招待された Buchanan 家でのディナーは、Tom の情婦 Myrtle から二度も電話がかかってきたことをきっかけに台無しになってしまったのである。Nick が初めて Buchanan 邸に入った時には、その豪邸の天井は wedding cake(10)に例えられていた。荒廃同然のディナーの後では、“a vigil beside a perfectly tangible body”(16)に例えられるほど変化してしまった。Nick の目には、Buchanan 家における結婚式のような華やかさが、数時間も経たないうちに、葬式の通夜のように一変したのである。Tom の不倫が招いた結果である。

Chapter 2 では、Nick は否応もなく、Tom と Myrtle に懇請されて、Tom が Myrtle に与えたアパートにおけるパーティーに付き合わされた。このパーティーの最後も滅茶苦茶に終わる。Daisy への嫉妬をあらわにして、Daisy の名前を叫び続ける Myrtle の顔を Tom が思い切り殴りつけ、Myrtle の鼻を折り、辺りを血だらけにしてしまった。Myrtle は自分を Daisy と同等だと思い込んでいたが、Tom にとっては、Myrtle は性欲を満たすための手段でしかなかったからである。

結局は、この時に Tom が Myrtle に対して振るった暴力の結果が、Myrtle の夫 George Wilson に妻の異変を感づかれることにつながり、その結果、Wilson は Myrtle を連れて西部に引っ越しすることを考える。Tom は、察知された以上、Myrtle との関係に終止符をすぐにでも打たね

ばならないと考えるに至る。Wilson の疑惑は結局は、Myrtle が yellow car に向かって行く原因となり、Tom の暴力は、Myrtle 轢殺事故の引き金にもなった。このことを読者が知るのは Chapter 7 においてであるが、story は、事態が不可避的に進行していくことの必然性を内包しており、最初から実に見事に構成されていると言わねばならない。

Tom の不倫の結果、Gatsby と Jordan と Nick とが共謀して Gatsby と Daisy を再会させた結果、そして、Daisy が Buchanan 邸に Gatsby と Jordan と Nick とを招待した結果、それらの結果の帰結として、取り返しのつかない惨事が連鎖的に起きた。Chapter 7 の Plaza Hotel の対決場面で、Gatsby の夢が決定的に瓦解した後、Tom の指示で、まず、Daisy と Gatsby が Gatsby の車でホテルを離れる。その後、残された Nick、Jordan、Tom が Tom の車に乗って帰ることになるが、その時の表現、“So we drove on toward death through the cooling twilight” (106) について私は次のように解釈する。death は Myrtle の轢殺事故だけではなく、主要人物全員にとっての死 (比喩的な意味も含めて) を暗示している。Myrtle 轢殺後の Daisy は、いつ自分の犯罪がばれるか、怯え続ける人生しか残されていない。Tom も、妻の犯罪が明るみに出れば、それとの関係で、自分の不倫も表ざたになり、これまでの position を失う。二人の将来は、客観的には、極めて混沌としており、破滅の危険を抱えている。破滅の危険から逃れている人間がいるとすれば、Jordan 一人だけだろう。しかし、Jordan すら、Nick の物語化という行為によって、あらゆる責任から逃れられることは出来なかった。

Myrtle の轢殺事故に至る過程で、我々三人 (Tom, Jordan, Nick) は全員が関与していた。我々がこれまでしてきたことが、結局は Myrtle の死という取り返しのつかない事態につながった。ホテルを出る時には、およそ想像も出来なかったことだが、我々三人は自分たちがこれまでしてきたことの不可避的な結果を目撃することとなる。そのような意味が we drove on toward death という Nick の表現に含まれていると思う。少な

くとも Nick は、この物語を語る時に、そういう自覚を持っていた筈だ。

Nick が書いたものは、You cannot escape the past という普遍的真実だった。その真実を物語化する過程で、Nick 自身も自分の過去の罪責から逃れることは出来なかった。自責の念を Nick が言語化する方法は、前記拙論で詳述したように、韜晦的ではあったが、それでもなお、真実を語ることを選び、結果的に、Nick 自身が関与した全ての真実を語り切ったという点で、Nick は本質的に、すぐれて良心的な語り手であった。

現実社会に失望と怒りしか持っていない青年にとって、選べる手段は限られている。その一つはテロである。*The Great Gatsby* と同じ 1925 年に刊行された Dos Passos の小説 *Manhattan Transfer* の主人公 Jimmy Herf は新聞記者として働くが、新聞が如何に真実を伝えないかを思い知り、絶望の拳句、一時は、新聞社の在るビルを爆破したい気持ちになる。Jimmy Herf はテロリストにはならなかったが、我々の生きている世界の現実にはテロリストにあふれている。*The Great Gatsby* における Wilson は青年ではないが、怒りの対象を殺害して自殺したが、自爆とも言えるこの行為は、本質的にはテロである。もう一つの選択は、Jordan のように、自分の能力（不正行為を平気で行なうことも含め）一本で出来るだけ要領よく生きて、世界に満ち溢れる不正義や欺瞞には一切関心を持たない生き方である。自分さえよければよいという生き方である。Jordan は 1920 年代のアメリカに出現し始めた自立・自力で生きていく新しいタイプの女性の一人であるが、Nick による Jordan の評価は極めて否定的である。もう一つの生き方を示したのが Nick である。真実を書くこと。そのことに生きる意味を見い出す。勿論、これは誰にでも出来ることではないが、そして、真実を書くことを選ぶということは、地獄を選択することを意味するが、敢えて、地獄を選択する人間がいなくなると、世界が地獄になる。今、私たちが生きている世界は、テロリズムや真実まがいの虚偽情報を流し続けるマスコミにあふれていて、地獄に化しつつある。出でよ、現代の Nick Carraway。¹²⁾

Bibliography

Primary Sources: Works by F. Scott Fitzgerald

The Great Gatsby. New York: Scribners, 1925.

The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript, ed. Matthew J. Bruccoli. Washington: Bruccoli Clark/NCR, 1973.

The Great Gatsby. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Cambridge University Press, 1991.

The Great Gatsby: A Variorum Edition. Ed. James L. W. West III. New York: Cambridge University Press, 2019.

Bryer, Jackson R., and Cathy W. Barks, eds. *Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald*. New York: St. Martin's Press, 2002.

Bruccoli, Matthew J. *Fitzgerald and Hemingway: A Dangerous Friendship*. New York: Carroll and Graf, 1994.

Secondary Sources

Berg, A. Scott. *Max Perkins: Editor of Genius*. New York: Thomas Congdon, 1978.

Lampe, Philip E., ed. *Adultery in the United States*, Buffalo, New York: Prometheus Books, 1987.

内田勉、*The Great Gatsby* の研究：語りの真実性と語り手の倫理、習院大學文學部「研究年報」2017.

-
- 12) Nick は真実を語ったとは言っても、当時のアメリカ白人男性一般の限界を示している。*The Great Gatsby* 最後の新大陸への言及は、新大陸を征服する側からの視点であって、征服される先住民たちの立場は全く考えていない。白人からすれば、新大陸との遭遇は最後まで最大の夢であっただろうが、先住民たちからすれば、征服・虐殺される歴史の始まりである。しかし、Nick の最後の語りは、歴史を無視した欺瞞ではなく、当時のアメリカ白人一般の歪みや無知をそのまま反映しているのである。先住民虐殺については、19 世紀に既に知られていた。先住民虐殺の歴史を描いたノンフィクション作品 (Helen Hunt Jackson, *A Century of Dishonor*, 1881) も出ていた。そのような事実にも、フィッツジェラルドも Nick も全く関心を持ってなかったという、彼らの限界は如何に強調しても強調し過ぎるということはない。